

雲南彝族尼蘇支系の名付け習俗

楊 六金[※]

尼蘇支系はおよそ170万人余りで、主に雲南省紅河江兩岸（哀牢山の上）に住んでいる。尼蘇支系の名付けは人々をよぶときの一種の記号であり、互いに区別できるように用いられているものである。尼蘇支系のこのような名付け方はかなり独特なもので、昔は老若男女問わず、一種の独特な彝語の名前を持っていた。このような名前はほかの民族には、感じが悪く、書きづらく、そして含意（含まれている意味）もよくないように思われる。しかし、尼蘇支系にとって、このような名前は感じが良く、書きやすく、含意も良いもののように感じられるのである。

明末清初以後、漢文化の影響を受けて、漢名（漢族風の名前）に変わってきたが、その漢名のなかには依然として多くのイ族の伝統の名付け方式と特色が残っている。

A、名付け方式

尼蘇支系の赤ちゃんの名付け方は男女によって異なる。例えば、赤ちゃんが男の子であれば、生まれて九日目あるいは九か月目に名前を付け、女の子であれば、生まれて七日目あるいは七か月目に名前を付ける。各家によって、名付けの時間と方式には、若干の違いがあるが、大多数の家は一致している。名付けは、赤ちゃんが生まれたのち、家の長老が畢摩さん^(注1)に教を請い、畢摩さんは赤ちゃんの生年月日、時間から運勢を占って名前を決める。赤ちゃんによっては、名前を両親や祖父母がつけることもあるし、職人、師匠、乞食、畢摩さん、赤ちゃんが生まれて初めての訪問者（家族、親戚以外）、または役人につけてもらうこともある。誰が名前を付けるにせよ、名前を付けた日には、赤ちゃんの家では必ず宴席を設け、（赤ちゃんの）母方の祖父や叔父を招待し、同時に同族の最長老、それから隣家の長老と村の長老を招く。長老たちは応接間の宴席に集い、その後、名付け親は自分が付けようとしている名前が赤ちゃんにふさわしいかどうかを、占いによって決める。

尼蘇支系の赤ちゃんの名付けの占いは、一般的には、一本の栗の木（手の指ほどの長さで、箸ぐらいの太さの棒）を半分に割ったのを使い、名付け親は二つの木片を手を持って、占いながら名前を読み上げ、その後、手に持った二つの木片を一つの大きな碗のなかに投げ入れる。もし、二つの木片が両方とも下に向いていれば（内側と外側）、その名前は赤ちゃんにふさわしくないで、違う名前をつけるようにと示している。もし、二つの木片の向きが異なれば、赤ちゃんにふさわしい名前であることを示し、赤ちゃんの名前がそれで決まったことになる。そして、赤ちゃんの両親はすぐに赤ちゃんを抱いて長老たちに三回ひれ伏して礼をする。この名付

※雲南省社会科学院紅河ハニ族民族研究所

けの儀式に参加した人々は、一人ずつ形式的（しるしとして）に赤ちゃんに一、二角あるいは二元をあげ、赤ちゃんに祝福していることを表す。もし、赤ちゃんの名付け後、赤ちゃんが不健康で、泣いてばかりあるいは、家族がしょっちゅう病気にかかっているという場合、赤ちゃんの名前を変えなければならない。名前を変えるとき、ある家では自宅で改名の儀式を行うし、ある家では吉日を選んで、村の境の小川あるいは水の流れるところへ行き、橋を架け、道路を修繕する。それと同時に、一羽の大きくて赤い雄鶏をしめ、煮てから、竹で編んだテーブルの上に置き、往來人を待つ。最初に現れた人が誰であろうと、民族や男女、身分を問わず、赤ちゃんの父母は丁寧に酒をすすめ、そして鶏肉を食べてもらい、そして、赤ちゃんに名付けをしてもらうよう頼む。当地ニ蘇支系の風俗によれば、頼まれた人はできるだけ断わらないほうがいいということである。これは互いにとっての福となるからである。赤ちゃんに名付けしてやると、その人は赤ちゃんの“新媽”（新しい父親、名付け親）あるいは“新媽”（新しい母親）となり、赤ちゃんの親と“親家”（親戚関係）となる。

以上どの形式で名付けするにしろ、毎年大きい祭日のとき、赤ちゃんの家は餅米を一包み、肉を一塊、酒を一本持って“親家”に贈る。そして、帰りに“親家”は鶏一羽あるいは卵一つを返す。このようにして、祭日あるいは冠婚葬祭のたびに、互いに招きあう。また特別な困難に遭ったときにも、互いに助けあう。これがイ族ニ蘇支系の伝統風俗である。

B、名付けの特色

ニ蘇支系の名付けは、普通二文字を用いる。第一文字目は、名付け親やその他の形態に関連がある文字で、第二文字目は、発展、繁栄や願望など良いこと、美しいことを表す字である。男子名前の最後の一文字は：学、文、周…などである。“学”はニ蘇語で、新しい、幸せ、円満という意味、“文”は購入する意味、“周”は増やす、発展、繁栄の意味である。女子名前の最後の一文字は能、尾、白…などである。“能”は善良、良妻賢母の意味で、“尾”は花の意味で、“白”はつばみの意味である。ニ蘇支系は名付けするとき、普通姓を加えず、名前だけを付ける。姓は名前を付けた後、はめこむものである。以下名前のいくつかの例を男女別に挙げる。

- ①會祖父が付けた名前　男子は普通“圧文”，“圧学”といい、女子は“圧能”，“圧尾”という。ニ蘇語では會祖父のことを“阿圧朋”とよぶので、會祖父が付けた名前はみな“圧”という文字を持っている。
- ②祖父が付けた名前　男子は普通“円周”，“延学”といい、女子は“延白”，“延能”という。ニ蘇語では祖父のことを“阿延”とよぶので、祖父が付けた名前はみな“延”の文字を含んでいる。
- ③祖母が付けた名前　男子は普通“那文”，“那学”といい、女子は“那白”，“那尾”という。ニ蘇語では祖母のことを“阿那”とよぶので、祖母が付けた名前はみな“那”という文字を持っている。
- ④外祖父が付けた名前　男子は“普周”，“普学”といい、女子は“普白”，“普能”という。

尼蘇語では外祖父のことを“阿普”とよぶので、外祖父が付けた名前はみな“普”という文字を持っている。

⑤外祖母が付けた名前 男子は“朋周”，“朋学”といい，女子は“朋能”，“朋尾”という。尼蘇語では外祖母のことを“阿朋”とよぶので，外祖母が付けた名前はみな“朋”という文字を持っている。

⑥畢摩さんが付けた名前 男子は普通“崩学”，“崩周”といい，女子は“崩能”，“崩白”という。尼蘇語では畢摩さんのことを“崩瑪”とよぶので，畢摩さんが付けた名前はみな“崩”という文字を持っている。

⑦役人が付けた名前 男子は“子周”，“子学”といい，女子は“子能”，“子尾”という。尼蘇語では役人のことを“子慢”とよぶので，役人が付けた名前はみな“子”という文字を持っている。

⑧職人師匠が付けた名前 男子は普通“先学”，“先文”といい，女子は“先能”，“先尾”という。尼蘇語では職人師匠のことを“先祖”とよぶので，職人師匠が付けた名前はみな“先”という文字を持っている。

⑨乞食が付けた名前 男子は“坐文”，“坐周”といい，女子は“坐能”，“坐尾”という。尼蘇語では乞食のことを“作坐腊朋”とよぶので，乞食が付けた名前はみな“坐”という文字を持っている。

⑩十二干支に関係がある名前 例えば，鳥年あるいは鳥の日に生まれた人の名前は，男子は普通“燕周”，“燕学”といい，女子は“燕能”，“燕白”という。尼蘇語では鳥を“燕”とよぶので，付けた名前はみな“燕”という文字を持っている。

⑪橋をかけ，道を修繕する儀式で付けた名前 男子は“头周”，“头学”といい，女子は“头尾”，“头尾”という。尼蘇語では橋を“头”とよぶので，付けた名前はみな“头”という文字を持っている。

⑫胎盤やへその緒に関係のある名前 男子は普通“奔学”，“奔周”といい，女子は“奔能”，“奔白”という。尼蘇語では胎盤を“奔头”とよび，へその緒を“奔建”とよぶので，付けた名前も“奔”という文字を持っている。

⑬石に関係がある名前 男子は“鲁学”，“鲁头”といい，女子は“鲁尾”，“鲁能”という。尼蘇語では石を“鲁”とよぶので，石に関係のある名前はみな“鲁”とよぶので，石に関係のある名前はみな“鲁”という文字を持っている。

⑭自由市場に関係がある名前 男子は普通“礼学”，“礼周”といい，女子は“礼能”，“礼白”という。尼蘇語では市場を“礼”とよぶので，市場に関係のある名前はみな“礼”という文字を持っている。

上述した尼蘇支系の名付けの特色で，彼（彼女）の性別および形態を推測することができる。この種の名付けの特色は，大変科学性と芸術性を持ち，古代イ族の歴史文化を研究するために，積極的な役割を果たす。

C, 父子連名性

イ族は希慕遮から代々伝える：希慕遮—遮道古—古珠詩—詩雅立—立雅密—密噠拐—噠拐作—作雅且—且雅宗—宗雅賢—賢雅己—己迫勒—迫勒道—道慕尼—慕尼赤—赤雅索—索雅德—德喜所—喜所夙—夙必額—必額堵—堵洗显—洗显陀—陀阿大—大阿武—阿武補—補珠娄—娄珠武—武洛撮—撮珠。^(注2)

以上(三十代の人)は、語文献に掲載されているものである。容易にわかるように、遠い昔の“六祖分支”の前に、イ族の先民たちはすでに父系主体の社会に入り、彼らは集まって、居住し、やがて政治、経済、文化の中心が生まれ、階級社会の上部構造のワンセットができあがったのである。それゆえ、自己の代々伝える後世の数を覚えやすいように、先民たちは名付けすることに当たって、チェンのような一輪一輪をとめ、一名一名続く父子連名性を実施したのである。古代イ族のこの種の父子連名性は、現在尼蘇支系のなかにすでに散失してしまった。しかし、他のイ族支系のなかに依然として残されている。

D, 名付けの変遷

現在尼蘇支系の名付けは、漢民族と大同小異であり、姓と名前とつなぎ、字の意味、字形および字の音がきれいな文字で持って、名前を付ける。調査によると、1949年以前生まれの70%以上はイ語名前を持っている。1950年から1970年の間に生まれの60%以上はこのような名前(イ語と漢名)を持っている。1970年以降生まれの15%は古代イ族名前を残している以外、大多数の人は漢民族の名前を使うようになった。

注釈：

- 1, 畢摩：イ族の古い知識人。
- 2, 馬学良：『爨文丛刻』, 四川民族出版社 1986。

(稲村 務, 筑波大学大学院歴史・人類学研究科訳)